

来年母校が創立百周年を迎えます。同窓会がこれを祝い、5月20日に、「能・狂言」公演を企画しました。これまであまり見る事がなかったので、夫と共に出かけました。久しぶりの母校のキャンパスは緑の色濃く、学生時代に戻って緑陰のベンチで、おにぎりを食べ、数名の同級生にも会うことが出来ました。懐かしさと穏やかさの混じった最高のくつろぎのひと時を味わうことが出来ました。

今回の狂言「棒縛」の主演シテの野村萬斎氏も、能「葵上」のシテ西村高夫氏も、共に同窓生の関係者であり、特別の交誼を賜ったものようでした。講堂は満席でした。講壇はすっかり異空間になって、日本の古典芸能の粋を表現する簡素で高雅な能舞台がしつらえてあり、期待で一杯の観劇となりました。



野村萬斎氏

狂言「棒縛」の筋書は単純で、見どころは滑稽味です。盗み酒をする者を懲らしめようと縛っておいて、留守をする主人。なんとしても酒を飲みたい者たちは縛られても、それをものともせず、飲んで、酔って、良い気分。これをお馴染みの萬斎氏が美男ぶりを発揮しながら、酔っ払いながら、呑兵衛ならではのセリフを繰り出して、歌い踊るといふ、楽しい舞台となりました。

狂言は会話もはっきりとしていて、動きも大きく、ユーモラスな展開ですから、私のような狂言を全く知らない者にも理解しやすく楽しめるものでした。

かつて、小学校で非常勤教諭をしていた時、文化祭に演劇指導を頼まれ、悩んだ末に決めたのが、狂言「附子」をモチーフにしたオペレッタでした。小学校4年生の男子が小坊主になって、女子はコーラスを担当しました。「棒縛」と同じような設定ですが「附子」では、お坊さんから毒が入っているから食べるなど言われたものを食べたら甘い！小坊主たちは全部食べてしまい、言い訳に器を割り、掛け軸を破ったから、自死しよう、これを呑んだということにします。そして舞台で大事な器や掛け軸を壊すという展開に、演じた生徒も観客も驚愕し、興味津々だったのを懐かしく思い出します。日常が非日常になる舞台が面白かったのでしょうか。今回もあの時のことを思い出しながら、日本的なユーモアをたっぷり味わいました。



西村高夫氏

能「葵上」は、解説なしには理解ができない演目でした。舞台には葵上を象徴する見事に美しい小袖が置かれていますが、本人は登場せず、物の怪に悩み、伏せられているという設定です。その原因は六条御息所の生霊によるということが巫女によって判明し、六条御息所の怨霊を鎮める加持祈祷をするという筋書です。

青ざめた泥目の面を付けた六条御息所が後半には般若の面を付けて、祈祷する山伏と対峙しながら苦悶しつつ舞います。ついに祈りにより癒され、真の知恵を得て、怨念が静まり、引き下がります。その時、般若の面が割れるとか、京劇のようにパッと切り替わり、小面になるとか、を期待したのですが、日本の古典芸能は楚々としていて、そのような劇的展開はありませんでした。

源氏物語の世界が背景ですが、恋の遍歴を繰り返す光源氏の犠牲者(?)である女性たちの嫉妬、屈辱、不安、寂しさは苦しみの極みとなるのでしょうか。今、お稽古している地歌の「夕顔」も源氏物語から取られています。光源氏は愛人六条御息所の家に行く途中に、夕顔の住まいに立ち寄りしてしまいます。やがて「寄する車のおとづれも、絶えて」という一節が入って、「仮寝の夢もさめて身に染む夜半の風」と儂い恋の終わりも歌われています。六条御息所は、自分でも制することのできない怨念を、祈りとの格闘で、昇華させていきます。こういう「女の思い」を、「葵上」では丁寧に扱っているのかもしれませんが、けれども、謡の内容を聞き取るのが難しかったです。文楽の舞台は、電光掲示板を設営してあるのですが、能の静かで美しい、気品ある世界を見せてもらった一日でした。